

第三十二 國文國語の話

本居 豊 穎

我國の文章及言語の事は、既に木村講師物集講師落合講師佐藤講師など追々精しき講演ありて遺漏なけれともいさゝか思ひよりたる事等を取あつめて申し演る心得でありますが其主意の概目を分ていはゞ、先づ、

外國の文を我國の文に譯する注意

我國の言語の雅言と俗言との區別

我國の文章は勇壯活潑の風に乏しといふ論の辨

右の三事にて随分錯雜にはあれともこれらの事も既に諸講師のいはれたる事あれば重複に辨するは不可ならんと存する故に、唯拙者の思ふ事だけを述べて、其他は諸講師の講せられたるに譲て省畧致す心得ゆゑ、諸君もそのつもりで御聴取を請ふなり、

歐米各國に於ても各自に其言語は異なる趣に承れと、其大體は同一にて、支那と我國との言語の如く違ては居らぬやうであります、故に今日西洋の原書を我國の語

に翻譯するも、容易な事ではなけれども、しかし漢文の始めて渡來したる時に、之を我國の語に譯し讀みたる人々の骨折は、また非常な事でありしならんと思ひます、近世の如く我國の人は、幼少より漢字を習ひ漢文をわが國の詞によむ事に慣て見れば、一向造作もなき事のやうにて、却て西洋の文字や、西洋の文は讀む事も出來ず、聽てもわからぬ次第ながら、今の壯年諸君は、また幼少より英語に慣れ獨逸語を學ひなどしてあれば、却て其方が能くわかりて、我國の古文や古文などの方がわからぬであります、何事も習慣によるは勿論ながら、其漢文も歐文ももとの言語のままに讀むのみは學問次第にて出來るとするも、それを我國の言語に譯し、わが國の文章にうまく改め作る事は、なか／＼容易ならぬ事と思ひます、故にこれまで漢文をわが國の語法に讀み歐文をわが國の言語に翻譯してはあれども、いはゆる直譯といふ體にて、正しき我國の文章にはならず、否ならぬのみならず意味が違ひ自他が混淆して實は一向解せられぬ不具文が多いであります、但し大本の我國の言語に暗き人々が、之を讀む故に違て居るも氣がつかず、教る者も學ぶ者も違たなりに其意を解してすませて居る次第で、たま／＼我國の語法を心得た者が、之を論し之

を辨してもやはり其理がわからず、どちらに讀みても強て差はなきもの、如く思ふ輩が随分あるやうであります、但し近來は日本學國語の事も大分人々が力を入るやうになりたれば、追々明かにはなりませうが、これは大事な事にて歐米各國にても皆その自國の言文は大切に保護し、其國語の亡るは即ち其國の亡る譯ゆゑに、固く之を守る趣に承れば、我國人もわが自國の語の亂れず亡びぬやう、他國の語の爲に蹂躪せられぬやうに心掛たいものと思ひます、それには第一漢文及歐文をわが國の語法に譯す工合に深く工風を廻らして、唯原文のまゝを輕卒に譯さずして其文意を味ひたる上、わが國の文を以ていはゞ如是き所と其言語の運び方、所謂動詞の使用方に意を注かねばなりませぬ、今日は歐文の翻譯の方が必要なれども、漢文の方が古くして今までも人々の論辨したる事もあり、其理は一なれば先づ漢文の上にて一二の例を演べませう、

既に落合氏の文章の誤謬といふ講演にもいはれたるが如く、論語孟子の類の訓法に誤が多く、以前の道春の點は先穩なりし後藤點と變し一齋點となりて甚しき誤謬をなしたるが、其讀法の簡便なるより、世間一般の言語までが亂れたるにて、此事

は既に富士谷御杖の北邊隨筆にも論して、其伯父なる淇園といひたるは、儒者ながら注意して、繪事後素とあるをシロキヨリノチナリと讀たる由が書てあります、尾張の鈴木朗と云たる人は、後には宣長の門人となりたれども、漢學に力ありて種々著述もあります、が、論語參解大學參解などいふものを著して、悉く其訓法を改正してあります、

文章を書くに付て上古の人の注意したる事は、古事記の序に古傳を漢文に書ては意の差異を生するを恐れて、詞不逮心と歎きたる事あり、又古今集の序には和文なると漢文なると二様ありますが、實は漢文の序が、先づ出來て、後に假名の序はその漢文の序を譯したるが如き姿に出來たるものであります、がこの二つを引合せて見ると、大に和漢の文の差のある所がよくわかり、又貫之朝臣が苦心してうまく書とられたる手際もわかります、今その中の一二を引出ていはゞ、

人之在世不能無爲、思慮易遷、衰樂相變、感生於志、詠形於言とあるを、世の中にある人、事わざしげきものなれば、心におもふことを、みるものきくものについていひ出せるなりと作る、

人之在世を世の中にある人といひ、思慮易遷以下を事わさしけきものなれば云々といひかへたり。

春鶯之轉花中、秋蟬之吟樹上、雖無曲折、各發歌謠、物皆有之、自然之理也とあるを、「花になく鶯、水にすむ蛙の聲をきけば、いきとしいけるものいづれか歌をよまざりける」と作る。

春鶯を花になく鶯としたる故に、秋蟬を蛙にかへて水にすむ蛙といひて、其詞を對にしたり、尤かの蛙は所謂かじかといふものにて秋の物なり、雖無曲折より以下を、いきとしいけるものいづれか歌をよまざりけるといひかへたり。

譬猶拂雲之樹生、自寸苗之烟、浮天之波起、一滴之露とあるを、

「遠きところも出たつ足もとよりはじまりて年月をわたり、高き山もふもとのちりひちよりなりて、天雲たなびくまでおひのぼれるがごとく」と作る。

この二つは素より譬なれば、何にても同じ事なるを以て、事をかへて樹と水との二を道路と山岳にかへたり。

右は素より直譯に非ず、別に書たる體ながら、其改め方が餘程面しろく、且言語の使

用法が漢文に少しも沈まず、我國語國文の體をうるはしく具へたるは、さすがに紀氏なれば、其等の事ながら、漢文を和譯するにはよき模範であります、又から物語といふ書がありますが、これは誰の作れるものとも詳ならざれど、西行上人が自筆の本あるよしなれば、或は此僧の作なるか、然らざるも其時代のものには相違ありませぬが、史記や左傳や白氏文集などの中にある人々の傳を、我國の物語風に記して、其人々に和歌をよませたる一の面しろき趣向のものにて、例の琵琶行を我國の詞にしたる、坂正臣氏の潯陽江といふ一章近來出來て至極おもしろきが、既に此から物語の中にも、この琵琶行の一段もあります、同じ事をいひても、我國はわが國の言語の綴り方がありて、必原文の通りにはあらざる理なれば、今の翻譯家も何卒よく我國の語法を吞込て、間違のなきやうにせられたき事であります、尙又一例を引出ていは、日本紀の文は全く漢文でありますが、昔より之を和訓にしたるものにて、世々の學士等が訓を附したるも、隨分骨折の趣は察せられますが、尙漢文の文字に惹れて十分ならぬ訓なるを、古事記傳に所々引出て訓を改めたるをくらべて見ると、又大に發明する事があります、今一二を引出ていは、神武紀の中に、

諸皇子對曰理實灼然我亦恒以爲念宜早行之とあるを舊訓には、

「モロ／＼ノミコタチコタヘテマヲサクコトワリイヤチコナリオレラモツチ
ニオモヒトシツムベスミヤカニオコナヒタマヘ」とあり

改めたる訓は

「ミコタチマヲシタマハクウベナリオノレラモツネシカコソオモヘレハヤク
イデマサチトマヲシタマヒキ」とあり

臣聞天壓神至旦夕畏懼善乎烏汝鳴之若此者歟とあるを舊訓には

「ヤツカレアメオスノカミイタリマストウケタマハリテアシタユフベニオチ
カシコマルヨイカナイマシガカクナクト云テ」とあり

改訓は

「アメノオシガミノイデマストキテアサヨヒニカシコミヲルヲナレガカク
ナクコトノヨサトイヒテ」とあり

此類は澤山にて煩しければ右の二條のみを舉ましたるが右を引くらべて考ふれば明瞭にわかります

次に我國の言語に雅言と俗言とある事は諸君もよく知らるゝ通りにて此事は落合講師の普通語に就てといふ講演に詳にいはれてありますが如く古言の中にも當時の俗言あり今日の普通語の中にも俗言ならざるものもありますがこの俗言といふものは皆誤りたり訛たりしたる物にて甚不正の語なれば文章を作るには能く注意せねばなりませぬ無闇に使用してはいよく我國の言語を悪くする媒になる事なり尙諸國の方言といふものもありて地方の人の耳には聞取がたしこれ亦各地の俗言なり然るに近來言文一致の説もありますが到底言文一致といふ事は行はれぬ事にて是非これを行はんとするならば先づ御互に毎日ものを言ふ詞から改めてかゝらねばならずそれは世上一般とても出來得る事にあらねばやはり東京人は東京風の俗言を使ひ京坂四國九州奥羽北越各自に慣來りたる普通語のまゝに用を辨する外はあるまじけれど其中に甚しき卑俗語はなるべく追々注意して斥けたきものと思ひます

東京の俗言中にもベラボウオテンバシヤベルドナルヤンチャトンチキケン
ノンカラッキシの類甚多し何々ダッケといふ詞は何々にてありたりけんといふ

を切めたる訛言と思はれますが、よくもかくまで短く切めたること、驚きま
す。

落合講師の言語の成立また木村講師の東洋の國語學といふ至極おもしろく、よく
いはれてありますれば、諸君も御研究ありたき事と思ひますが、前にも申したる尾
張の鈴木朗といふ人、雅語音聲考といふものを記して、やはりこの類の事を論じて
あります。右の兩講師の講演にならひて、形、狀言の事を少々申しますが、すべて此類
の語も清音に唱れは雅言なるを俗言には首より濁りて唱るが多きを見ても、清音
の正雅にして濁音の陋猥なる理を知るべきなり。

からく	ガラく	きらく	ギラく	くるく	グルく
くたく	クタく	ころく	ゴロく	ことく	ゴトく
さらく	ザラく	くらく	グラく	まく	シク
まみく	シミく	すらく	ズラく	すかく	ズカく
するく	ズルく	そよく	ゾヨく	そろく	ゾロく
つぶく	ツブく	とろく	ドロく	とく	ドク

はらく	バラく	はたく	バタく	ひらく	ピラく
ふつく	フツく	ほとく	ボトく	ほろく	ボロく

同種の音に清音にしても雅言には聞かぬは

ガッく	ガクく	ゲラく	ダラく	ヂリく	ヅルく
バクく	バサく	ピカく	ビクく	ピコく	ブハく
ブラく	ベラく	ボヤく			

但し此中なるダラくは垂タルといふ言より出、ヅルくは連ツラナルより出、ピカくは光ヒカルよ
り出、ブハくは古言のふはより出、ベラくはひらくの轉にはあれど、如此使
ふは俗言なり、又濁音には發せねど俗言なるは、

ウカく	ウトく	ウロく	オズく	オヤく	オドく
ニコく	ニタク	ヌラく	チバく	チツく	ノロく
ノック	ホヤく	ミチく	ミシく	ムツく	ムズく
メック	ヘタク	モコく	モヂく	ヤハく	ヤラく
イラく	イソく	ユルく	エゴく	エヅく	ヨロく

此中には必しも俗言ならざるが如きもあり、また語を重ねずしていへば雅言なるもあり、又半濁音なるは、

モヨロ

ジョラ

チヨロ

チヨク

バリ

ビカ

ブル

ブリ

ペカ

ペロ

ポチャ

入聲に唱る一種の俗なる形状言は

ウツカリ

ウツトリ

カツキリ

ガツカリ

ガツクリ

ガツタリ

キツカリ

キツシリ

グツタリ

グツスリ

ゲツソリ

コツソリ
ゴツソリ
トモ

サツバリ

シツカリ

シツクリ

シツトリ

シツポリ

スツバリ

スツクリ
スツカリ
トモ

ソツクリ

タツプリ

チツクリ

ツツタリ

テツキリ

トツクリ

ドツカリ

ドツサリ

ニツコリ

ヌツクリ

チツツリ

チツトリ

ノツソリ

ハツキリ

バツタリ
バツタリ
トモ

ヒツクリ

ヒツタリ
ビツタリトモ
ビツタリトモ

フツツリ
フツツリトモ
ブツツリトモ

ベツタリ

ボツチリ

ボツクリ
ボツクリ
トモ

ミツチリ

ムツツリ

ムツクリ

メツキリ

ユツクリ

ユツタリ

又必しも入聲にいはずともあるべきを東京などにて然唱るは、

アツタカイ

ヒヤツコイ

ウザツコイ

ヤスツポイ

ノロツコイ

ズルツコイ

ジレツタイ

クジツポイ

アキツポイ

入聲及半濁の殊に卑野なる事を思ふべし又撥る音にては、

アンダリ

ウンザリ

ザンブリ

ズンブリ

チンマリ

ヅングリ

ホンノリ

ハンナリ

ボンヤリ

マンジリ

グンニヤリ

同じく撥音にて又一種

ケンツク
ボンツクドンツク
ワンバク

チンチク

ツンツク

右等の類は尙此他にも多くあるべけれど、今思ひ出たる分のみを擧るなり、又同言にして雅と俗と意を異にし、古と今と用法を異にし、地方に依て意を異にする類あり、これは詞の沿革變遷による事にて、雅言といふ中にも時代に隨ひて其使用法の違へるもある事ながら、甚まぎらはしきものなり、一二の例をいはず、

なほ

雅にはヤハリマダの意なるを新古今集更科日記などにはイヨイ

さへ

ヨマス／＼の意にいへるもあり、今俗も同じ、

なか／＼

雅には一つ物のある上に亦と副る意なるを、俗には雅言にてダニ

なか／＼

とかスラとかいふ所に使へり、

なか／＼

雅にはカヘツテの意なるを、足利時代の俗言には人の言ふに對へ

て、然りと諾する意に使ひたりとみえて、狂言の詞にあるは此意なり、今俗には決して然らずといふ場合に使ふ、

すさまじ

雅には不興殺風景なる意なる事、枕草子にすさまじきものとして

ゆゑし

出せる類にて明なり、これも鎌倉時代前後よりは、勢の強く壯なる意に使ひたるは軍記類にもあるを、今俗も同じ、

やさし

雅には忌々しの意にて、鎌倉時代の物にもゆゑしき大事などいへるは、尙昔の義に異ならざるもあるを、後には勇々しなどの字義と心得たるものと見えて、これも亦勢の強き意となりて、今俗も同じ、雅にはハヅカシの意なるを、これも鎌倉時代前後よりは、優にやさしなどいひて、柔和風流なる意とし、今俗も京坂邊にては此意なるを、東京の俗には容易なる意につかへり、

あばれ

雅には家居などの荒廢したる狀をいふ詞なるを、今俗は人の亂暴なるをいふ、

此類甚多くして擧るに遑あらず、

さて又我國の文章は高尙優美の風には富たる上に、人情の細微なるを書く事も出来得れども、勇壯活潑の風には乏しいといふ説あるがごとし、これはいかにも漢文漢語の壯快なる勢あるにくらべては及ばざるが如く思はるれど、全體我國は上古よ

り武を尙ぶ風俗にして、所謂日本魂なるものを具へたるより考へても、勇壯なる文章のなき理はあらざるを、何故ならんと考るに、言語は所謂言靈の幸ふ國ともいひて不完全を感じる事はなけれど、我國の風俗は精神實力を主として、所謂文華といふ點には深く意を注がず、神ながら言舉せぬ國など、も稱して、剛毅木訥ともいふべき方なる故ならんか、但し今古典中に就てその文勢あるものを探り見れば、古事記の上卷天照大御神の須佐之男神を待問ひたまふ條に

即解御髮纏御美豆羅而、乃於左右御美豆羅亦於御鬢亦於左右御手各纏持八尺勾瓊之五百津之美須麻流之珠而、曾毘良邇者負千入之鞆附五百入之鞆亦所取佩伊都之竹鞆而、弓腹振立而、堅庭者於向股踏那豆美如沫雪蹶散而、伊都之男建踏建而待問何故上來、

同じ續きの宇氣比の條に

天照大御神先乞度建速須佐之男命所佩十拳劔、打折三段而、奴那登母母山良爾、振滌天之眞名井而、佐賀美爾迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名多紀理毘賣命、

又石屋戸の條に

召天兒屋命布刀玉命而、内扳天香山之眞男鹿之肩拔而、取天香山之天波波迦而、令占合麻迦那波而、天香山之五百津眞賢木矣、根許士爾許士而、於上枝取著八尺勾瓊之五百津之御須麻流之玉、於中枝取繁八咫鏡、於下枝取垂白丹寸手青丹寸手而、此種種物者布刀玉命布刀御幣登取持而、天兒屋命布刀詔戸言禱白而、天手力男神隱立戸掖而、天宇受賣命手次繫天香山之天之日影而、爲鬘天之眞拆而、手草結天香山之小竹葉而、於天之石屋戸伏汗氣而、踏登扨呂許志、爲神懸而、掛出曾乳裳緒忍垂於番登也、

大國主神の條に

遙望呼謂大穴牟遲神曰、其汝所持之生大刀生弓矢以而、汝庶兄弟者、追伏坂之御尾、亦追撥河之瀬而、意禮爲大國主神、亦爲宇都志國玉神、而我之女須世理毘賣爲嫡妻而、於宇迦能山之山本、於底津石根宮柱布刀斯理於高天原水椽多迦斯理而、居是奴也、

伊那佐之小濱の條に

建御名方神千引石擎手末而來言、誰來我國而忍忍如此物言、然欲力競故我先欲取其御手、故令取其御手者即取成立氷、亦取成劔及、故爾懼而退居、爾欲取其建御名方神之手、乞歸而取者、如取若輩、搯批而投離者、即逃去、

大祓詞の中

如此依志奉志國中爾荒振神等^平、神問^志問志賜、神掃掃賜^比、語問志磐根樹立草之垣^平、語止^且、天之磐座放天之八重雲^平、伊頭乃千別爾千別^且、天降依志奉支、

また

如此出波天津宮事以^且、大中臣天津金木^平、本打切末打斷^且、千座置座爾置足^波、^且、天津菅曾^平、本刈斷末刈切^且、八針爾取辟^且、天津祝詞乃太祝詞事^平、宣禮、如此久乃良波、天津神波、天磐門^平、押披^且、天之八重雲^平、伊頭乃千別爾千別^且、所聞食武、國津神波高山之末短山末爾上座^且、高山之伊穗理短山之伊穗理^平、撥別^且、所聞食武、如此所聞食^波、皇御孫之命乃朝廷^平、始^且、天下四方國^波、罪止云布罪波不在止、科戸之風乃天之八重雲^平、吹放事之如久、朝之御霧夕之御霧^平、朝風夕風乃吹掃事之如久、大津邊爾居大船^平、舳解放、艫解放^且、大海原爾、押放事之如久、彼方

繁木本^平、燒鎌乃敏鎌以^且、打拂事之如久、遺罪波不在止、祓給比清給事^平、高山之末短山之末^{里與}、佐久那太理爾、落多支都速川能瀬坐須瀬織津比咩止云神、大海原爾持出^奈、如此持出往波、荒鹽之鹽乃八百道乃、八鹽道之鹽乃八百會爾座須、速開都比咩止云神、持可吞^且、如此久可々吞^波、氣吹戸坐須、氣吹戸主止云神、根國底之國爾氣吹放^且、如此久氣吹放^波、根國底之國爾坐速佐須良比咩登云神、持佐須良比失^且、^平、

續日本紀天平神護三年十月の詔詞の中に

是東人波常爾云久、額爾箭波立^止、背波箭方不立止云天、君^平、一心^平、以天護物曾、此心知天汝都可止^弊、勅^比、御命^平、不忘此狀、悟天諸東國乃人等謹^利、奉侍禮、

これらの文章の語氣を思ふに、最上右の詞にて、今人の耳には遠きやうなれど、壯快活潑の氣風なしといふべからず、歌は文章とは別なれど、萬葉集中長短歌の中には大にこの勇武の風調あるもの多く、古今集にも雜歌なるよみ人しらすの歌の中には見るべきものあり、後世にても源實朝公其他にも少々はなきにあらず、歌の事はまた別にいひ試みんと思へば、今日は申さねど、文も歌も共に其の人の精神より出

るものにて、平安京以後は文華にのみ流れ、武事衰へたると、其文學はすべて、漢文詩賦を專として、我國の歌文はたゞ婦女子の手に流れたるより、たま／＼男子のこれを作るも、其柔弱の風に和せられたるを以て、遂に我國の歌文は勇壯活潑の氣風なき物の如くなれるならんと思ひます、尙後世の文章にても、ひろく探り見ば勇壯の氣勢ある文もなきには非ざらんと思へど、多くは漢文をかなに書きたるが如きものありて、純粹の我國風の文は稀なるやうに思はれます、但し前條に述たる如くなれば、自今大に奮發して上古の勇武の風を挽回し、活潑の氣を養ひて、歌も文も一洗せば、必我國の歌文にして勇壯活潑の風に乏しといふ慨歎は消滅せしむるも難きにはあらざらんと信じます、

但しこれに就て又一事申すべき事あり、既に漢字三音考にも論じたるが如く、我國の音はすべて純粹正確なるを以て、其言語も自然圓滑にして角なき物の如く、外國の音のやうに入聲半濁などいふものはなく、外國の音は多く紆曲急促なれば、其言語も亦入聲半濁撥音多き理であります、然るに其入聲半濁撥音多き言は、自然激烈なるが如く聞ゆるものにて、我國人も年久しくその音聲に馴たるより、却て我國の正

雅なる言語は勇壯ならざるが如き感覺をなす點もなきに非るべし、今試に一二の例を擧ていはん、

なにぞ	なにすれぞを	ナンゾ	ナンスレゾ
いかにぞ	いづくにかを	イカンゾ	イヅクンカ
かたくす	やすくすを	カタンズ	ヤスンズ
おもくす	かるくすを	オモンズ	カロンズ
さきにす	あまくすを	サキンズ	アマンズ
なくば	うとくすを	ナクンバ	ウトンズ
しりぬ	さかりなりを	シンヌ	サカンナリ
ほと／＼	こぞりてを	ホトンド	コゾツテ
ゆきていひて	だにもいはずばを	ユイテイツテ	ダモイハズンバ
涙をふるひてを		ナンダラフルツテ	
あへずを		アヘンゼズ	ガヘンゼズといふは再訛れるにてことに卑し
あはれ	またくを	アツパレ	マツタク

もとも うたへを
尤 認

おもひはかり やみぬるかなを

モツトモ ウツタへ
オモンバカリ ヤンヌルカナ

此類漢文を読むに甚多し中古の有識の讀法に、大背をオホムベ又はオンベ朝所を
アイランドコロ、公達をキンダチなどいひ、武家にて政所をマンドコロ、如件をク
ダンノゴトシなどいひ、軍記類に去し何年をインデ何年、然候をサンサフオ、弓手
をウンデ、弓をよく引てをヨッピイテ、引立をヒツタテ、押伏をオツプセなどいふも
同例なり、これらすべて正しく唱へては柔弱遲鈍なるが如く、訛言の方勇壯敏捷な
るが如く聞ゆるならん、謠曲狂言などの語に何々といふを何々トイツ。バと唱るは
當時の俗言なりしなり、此類にて東京の普通語に、

只今只一人をタツタイマ、タツタヒトリ 入せられを イラッシャイ

眞赤眞白をマツカ、マツシロ、今一步ヲ進メテマツチロ

眞二つ素肌赤を マッパダツ、スツパダカ 眞すぐをマッスグ、又マッツグ

うちやるを ウッチャル うちこゝろすを プチコロス

うちつくるを ブッツケル おしへがすを オッペガス

おしはぬるを オッパネル おしつくるを オッツケル

くひつくを クツツク つきふすを ツツプス

とりしむるを トツチメル とりつくるを トツツケル

のみたくれを ノンダクレ ひきあぐるを ヒキヤゲル

ひきさらふるを ヒツサラエル ひきまぐるを ヒンマゲル

ひきたぐるを フンダクル やりつくるを ヤッツケル

などいふはいよく卑しく最下等社會の言にて、例の大根をデエコ、這入をヘエル
などいふ類なれども、此言語に馴たる人々は尙通常に唱るは、柔弱に思ふなるべけ
れば、前條のナンヅナシスレゾの類とは五十歩百歩の間なるべし、嗚呼百事習慣の
然らしむる所、反省すべき事であります、